盛岡市・アーラム大学教育交流五十周年

～サイスプログラム・ＡＬＴ・交流派遣研修～

盛岡市とアメリカ・インディアナ州にあるアーラム大学との教育交流が五十周年を迎えました。この交流は、**「アーラム大学短期留学生受入（サイスプログラム）」**、昭和五十七（一九八二）年に始まった**「英語指導講師（ＡＬＴ）の招聘」**、そして、初期は教員研修、中期から後期は生徒中心の研修として実施され、その後、令和二（二〇二〇）年度をもって事業終了となった**「交流派遣研修」**の三事業をさします。長い歴史の中で、これまで盛岡市に短期留学したアーラム大学生は約四百五十名、本市で勤務したＡＬＴは約百名、そしてインディアナ州で研修した教職員と生徒は合わせて約三百五十名にも上ります。本市に滞在した短期留学生や外国人講師は、盛岡を「第二の故郷」と感じ、その後も日本で活躍している方々も多くいます。

これらの交流事業は、異文化を持った方々と直接触れ合うことを通して、盛岡市の児童生徒、教職員の国際的な視野を広げ、外国語によるコミュニケーション能力を育成するとともに、日本人としての自覚を持って主体的に生きる力や、多様な他者を理解し協働しようとする態度の育成に寄与してきました。

サイスプログラムの歴史

サイス（ＳＩＣＥ）プログラム＝Studies in Cross-Cultural Education＝異文化教育交流

アーラム大学には、人類平和を願うクエーカー精神に基づき、各国の文化を学び理解し合うことが大切との考えから、様々な国での研修プログラムがあります。日本でのサイスプログラムは、一九六〇年代、東洋文化の持つ卓越性に学ぼうとして生まれました。早稲田大学とは教授交換等協力関係があり、このプログラムの開設にあたって学生を受け入れてくれる地方都市の斡旋を依頼するため、当時のアーラム大学学長が早稲田大学の総長を訪れた際、同席していた当時の岩手県知事・千田正氏の「岩手県で受け入れます」の一言がきっかけとなり、昭和四十八（一九七三）年からサイス留学生を県内で受入れることとなり、さらに昭和五十四（一九七九）年からは盛岡市教育委員会に事業が移管され、今日に至っています。

令和二（二〇二〇）及び三（二〇二一）年度は新型コロナウイルス感染症の世界的な流行のため、中止を余儀なくされましたが、今年度は六名のサイス留学生が盛岡市に、八月から十二月までの約四か月間の予定で訪れています。学生たちは、市内でホームステイをしながら、週の半分は市内中学校（ホストスクール）でＡＬＴ的な役割をして日本の教育制度を体感し、中学校における英語教育の充実と国際理解教育の推進の一翼を担っています。また週の残り半分は、平成十五（二〇〇三）年から学術協定を結んでいる岩手大学で、日本語を学んだり、引率教員の講義を受けたりしています。

なお、平成六（一九九六）年に発足したサイスプログラムのホストファミリー会（Ｅクラブ）の中には、アーラム大学の卒業式に渡米して参加する方もいます。様々な形で、個人の交流が長く続いているのがサイスプログラムの特徴です。

【令和四年度サイス留学生の六名（ホストファミリー顔合わせ会にて）】

サイスプログラム歴代担当者座談会の様子（抜粋）

現在製作が進められている教育交流五十周年記念誌の中から、同プログラムやＡＬＴに関わってきた歴代担当者による座談会の一部を御紹介します。

（参加者（全七名）：伊東雅美、菅原文江、菅野弘、熊谷一史、小田島篤史、山内浩、アーラム大学アソシエイト畠山有紀（敬称略））

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（伊東）私が初めに言われたのは、彼らは「学生である」ということです。日本の文化に興味を持った学生達が、実際に日本に身を置いて、ここで色々なものを吸収して、そのお礼で、授業のお手伝いをするというものですから、そこを分かった上で活用をしてくれということを、ぜひホストスクールにも伝えなければならないと思いました。

（畠山）授業の中で役に立つ学生もいれば、ちょっと消極的で、扱いづらい学生もいると思いますが、受け入れてくださる側とすれば、何か要望は

ありますか。

（菅野）むしろ、そのような学生達をどう生かすか、というのが、我々プロの教員に求められるところなのではないでしょうか。

（伊東）学生が好きなこと、得意なことは何か、コミュニケーション中で、それをどう生かすかというのは、教員が学級で子どもたちを生かすのと根っこは一緒かもしれないですね。

（熊谷）小学校にサイスの学生を全員集めて、コミュニケーションとして英語を使ってみようという機会を設けたことがありました。児童が、何回も何回も習ったことを使いながら会話に挑戦するのがよかったと思います。

【令和元年度サイス留学生による小学校訪問の様子】

（菅原）サイスの学生さんは、本当の外国人に近いですよね。こういうところがわからない、それを英語でどうやって説明しよう、というように、本当にコミュニケーションしなければならない状況ができるという面で、児童生徒、そして教師も勉強になると思っています。

（畠山）アーラム大学は多様性の縮図のような大学です。私がアソシエイトになったころから、様々なバックグラウンドの学生が来ていました。

（菅原）時代の方向性ということよりも、もともと人はそれぞれであるということ、そして海外の人達と交流することは、お互いに違いがあるということを学ぶことであり、とても大事な経験の一つだと思います。

（菅野）これからを生きていく子どもたちにとっては、十年、二十年経って、大人になる頃には、こういう流れがさらに進んでいるのではないでしょうか。実際、同じ悩みを持つ児童生徒がいる学校だと、むしろそのような方が来てくれたほうが、その児童生徒も、少し心が軽くなるかもしれません。

（山内）サイスで盛岡にきて、盛岡を知って、ＡＬＴになってまた戻って来たいと思うのは、すごく大きいと思います。

（伊東）「稚魚を孵化して」おかないとね。「鮭になって戻ってくる」感じかな。

（山内）アーラム大学派遣のＡＬＴは、若さという良さがあると思います。大学を卒業したばかりで、現場での指導経験は無いのですが、児童生徒にとても近いということです。

（熊谷）中学校では、ＡＬＴが勤務していて、さらにサイスの学生が来るとき、子ども達がたくさんの外国人と関われるので、とても良いチャンスだなと思います。その学校の英語の先生が、どういう場面を設定して、どんな風に活用していくか、ビジョンを持って上手く進めていくべきです。話は変わりますが、インディアナ派遣研修の参加生徒の中で、現在教員になってる方もいます。

（小田島）他にも、同じく参加者で、今旅行会社で御勤務されている方もいます。私の担当の時に、とても熱心にお世話していただきました。

（菅原）うれしいですよね、盛岡市とアーラム大学の教育交流が、そのように生かされていると思うと。

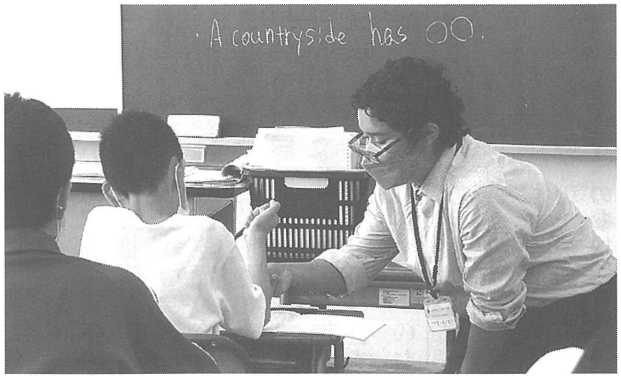
（畠山）「つながり」としての、サイス、ＡＬＴを、今後も末永く続けていければいいということがわかって安心しました。明るい未来の話がたくさん聞けて良かったです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今後の展望

今年度のホストスクールを訪問した際、留学生たちは、英語で受け答えができたという自信を中学生につけ、英語学習への意欲を高めようとしていました。一方で、中学生たちは、留学生との交流の中で、「正しい英語を使う」ことだけではなく、「英語でコミュニケーションをする」ことに楽しさを感じ、物おじせず学生に英語であいさつしたり、声をかけたりする場面が見られ、交流を楽しんでいました。留学生やＡＬＴが学校で過ごす日々は、これまでも、そしてこれからも、市内の児童生徒に生きた国際交流の機会を与えてくれるものと期待しています。

五十年という交流の歴史を共有してきたアーラム大学と本市は、その思いを一つにしながら様々な事業を運営してきました。この絆を、国際相互理解・国際友好親善の視点から、より一層強く確かなものにしていくこと、そして、これからの交流を通じて、子どもたちに、外国語によるコミュニケーション能力だけではなく、多様な他者と協働し、日常生活の諸課題に取り組もうとする資質・能力の育成も目指していきたいと考えます。



【令和四年度サイス留学生のホストスクール授業風景】